

論文

# 公的空間に現れる国家性についての試論

——東ティモールの公的空間における国家シンボルを手がかりに——

A Preliminary Study on Nationhood in Public Space:

National Symbols in Timor-Leste

齊藤穂高\*  
SAITO Hodaka

This article examines how “nationhood” is visually constructed, taking spatial representations reproduced in everyday life as a starting point. Using public spaces in Timor-Leste as a case study, it explores how nationhood is visually experienced, drawing on Michael Billig’s concept of “banal nationalism.” After outlining the path to independence, the paper focuses on three visual national symbols: the national flag, portraits of political leaders, and traditional sacred houses (uma lulik). It demonstrates how the flag appears on aircraft livery, streetlights, and street art, while motifs from leaders’ portraits and uma lulik are incorporated into public architecture. Together, these ordinary yet ubiquitous visuals reproduce a sense of Timorese identity and give travelers a felt sense of having arrived in another country.

キーワード：国家性 (Nationhood)、公的空間 (Public Space)、平凡なナショナリズム (Banal Nationalism)、視覚と国家経験 (Vision and the Experience of Nationhood)、東ティモール (Timor-Leste)

## 1. はじめに

“国家”とは不思議なものである。国家は実態があるように見えて、物質としてこの世の中に存在しているわけではない。にもかかわらず陸路で国境を越える際、もしくは航空機や船舶などで他国に入国する際、我々は確かに「別の国に来た」という感慨めいた感想を覚えることがある<sup>1</sup>。

筆者がインドネシアのバリ島から空路で、独立からまだ 20 余年ほどしか経っていない東ティモールを訪れた際にも、この「別の国に来た」という感覚を強く抱いた<sup>2</sup>。専門家として深く現地の文脈に通じているわけではない、一人の旅行者である筆者でさえ、そうした感覚が生じたのはなぜだろうか。その要因は多岐にわたるだろうが、もっとも直接的な理由は、空港に降り立った瞬間から目に入る国旗や建物などに代表される公的空間<sup>3</sup>の差異、すなわち国家の視覚的な見せ方の違いにあると考えられる。つまり、その政治的共同体において、構築されてきた表象そのものが、フィクションとしての国家を実体化し、イメージさせることで、来訪者にも「その国らしさ」を経験させていると言える<sup>4</sup>。

この点を考える上でも、東ティモールのような元来から存在する政治的共同体から独立を果たした「新国家」という事例は重要な示唆に富む。なぜなら、新生国家というフィクションを実体化するために、そして、新たな政治的共同体が領域内で成立したことを示す必要性から、旗や紋章、記念碑、儀礼、言語といった公的空間

<sup>1</sup> この点に関して (トーピー, 2008) において、国家が移動手段を合法的に独占する際に、パスポートといった身分証明証が国家の構成員として誰が「内」と「外」なのかを明確にすることで、近代国家を構築する上で極めて重要な役割を果たしたことが議論されてきた。「別の国」にきたという感覚自体も、このように創られてきたものの産物といえるのかもしれない。

<sup>2</sup> 本稿の記述は、2025 年 3 月 14 日から 17 日のディリ滞在中の観察および写真記録に基づく。筆者は滞在中、複数の交通機関を用い、ディリ市内を回るとともに、ワンダラービーチ (One Dollar Beach)、マナトゥット (Manatuto)、ラレイラ (Laleia) にも足を運んだ。特に短期滞在中の旅行者であることから、筆者の視覚的経験を手がかりに「東ティモールらしさ」を予備的に示すものととらえる。

<sup>3</sup> 本稿では、公的空間を国家や地方政府などの公的主体が整備・管理し、不特定多数の人びとが原則として立ち入ることのできる空間として考える。具体的には、道路・広場・公園・官公庁舎周辺・学校構内・空港ロビーなど、日常生活のなかで誰もがほぼ自明のものとして利用している場所や、公共交通機関などを含むことを想定している。

<sup>4</sup> 表象が国民国家形成に大きく関わった研究として (ウニッチャクン, 2003) が代表例であろう。

の様々な表象を織り上げることによってその国らしさをいわば視覚的に創り出し、繰り返し示し続ける必要があるからである (e.g. アンダーソン, 2007; ゲルナー, 2000; スミス, 1999 など)。また、「新国家」である以上、「その国らしさ」自体が創造の途上であると考えられるからである (e.g. Bentrovato & Skårås 2023)。つまり、新国家の公的空間に注目することからは、国家をどのように視覚的に理解できるものとして、想像しようとしているのか、その一端について考えることができる。

東ティモールのシンボル研究としては、キャサリン・E・アーサー (Arthur, 2019) によって緻密に議論されている。アーサーは国旗やストリートアートなどを手がかりに、独立以降の「国民アイデンティティの形成」や「抵抗の記憶」を詳細に論じている。しかし、本稿の関心はアーサーが扱ったシンボルの意味内容そのものではない。むしろ、それらがどのように空間化され、事情を知らない旅行者にも「ここは東ティモールだ」と見て理解できるものとして体験されるかにある<sup>5</sup>。

その観察の視点において重要となるのが、日常生活においてナショナル・アイデンティティの再生産を繰り返す諸運動に関する研究として、マイケル・ビリグの「平凡なナショナリズム」<sup>6</sup>という議論である。ビリグは、国家は常にフラグging (無意識の想起) によって再生産されていると指摘する<sup>7</sup>。その再生産の具体例としてビリグが着目したのは、普段何気なく垂れ下がる国旗や新聞の国内面や国際面といった、人々の日常生活の中にさりげなく存在し、ありふれた方法により人々の国家意識を再生産させる物や言説などであった。特にビリグの「平凡なナショナリズム」論の貢献は、過度に見慣れた、もしくは無意識的に存在する物事にも、国家性を再生産する役割やその機能に注目した点であるだろう<sup>8</sup>。

通常、新国家においては特に、「勢いよく振られる国旗」に代表されるナショナリズムの高揚が目されがちである。しかし、東ティモールにおいて、国旗や家屋の形に代表されるようならしさを構成するシンボルがいかにして日常の風景として定着し、東ティモールという国家を構成しているのか。あるいはどのように旅行者の目にそれらは映るのかを観察することは、国家の形成において視覚的事物が果たす役割を見る上で極めて有効である。

以上を踏まえ本稿では、このような日常において何気なく再生産される空間的表象から、どのようにその国らしさ、つまり“国家性”が視覚的に形成されるのかを考えてみたい。その観察フィールドと視点として、2002年にインドネシアから独立を果たした東ティモールの公的空間に多く観察された「国旗」「指導者のシンボル」そして「伝統家屋」といった国家シンボルに焦点を当て、その用いられ方や描かれ方から検討を試みる<sup>9</sup>。

<sup>5</sup> 東ティモールのナショナリズム研究はアーサーやインドネシアを専門にしたアンダーソンだけでなく、数多くの議論が蓄積されている (e.g. Kamisuna, 2023)。本稿では、このような先行研究を参照しつつも、東ティモールのナショナリズムの形成過程そのものに焦点を当てるものではない。成立した国家とそれを維持するために政治や人々が無意識的に日々行う可視化される「平凡なナショナリズム」に焦点を当て、国家はどう視覚化され、経験されるのかについて議論を試みる。

<sup>6</sup> 「平凡なナショナリズム」(Banal Nationalism) は「ありふれたナショナリズム」という日本語訳が当てられることもあるが、本稿では「平凡なナショナリズム」で統一する。

<sup>7</sup> この「平凡なナショナリズム」に関しては、(笹生, 2025; 笹生, 2023) において明確に整理されているため参照した。

<sup>8</sup> ビリグの「平凡なナショナリズム」は、その後、「日常のナショナリズム」の議論へと発展している。本稿では「日常のナショナリズム」の議論まで追うことができなかつたものの、その議論は本研究の対象とする公的空間において視覚的に国家性を感じられるものを対象にする上で不可欠と考えられることから、今後の取り組むべき課題としたい。

<sup>9</sup> 本稿では、「国旗」「指導者像」「伝統家屋」など、公的空間において「東ティモールらしさ」や国家性を可視化する役割を担う視覚的装置を、便宜的に「国家シンボル」と総称する。ここで国旗・指導者像・伝統家屋に注目するのは、いずれも日常的な空間のなかで国家を想起させる媒介として機能していると考えためである。ビリグは、「平凡なナショナリズム」はあまりにありふれたものであるがゆえに、なお実証的・体系的な作業が残されていると指摘している (Billig, 1995, p.175)。本稿で取り上げる事象も、著者が観察し得た範囲に依拠するものであり、事例選択が恣意的である、あるいは必ずしも「平凡なナショナリズム」には該当しないのではないか、という批判は十分に想定される。しかし本稿は、ビリグの提示した「平凡なナショナリズム」の枠組みを、国家を想起させる視覚的表象へと拡張することを試み、差し当たり観察することができた指導者像や伝統家屋といった空間的要素も検討対象に含める。これらは一見すると公定化され意図されたシンボルのように見えるが、実際には日常風景のなかに組み込まれ、国家意識を再生産している点で、「平凡なナショナリズム」の視覚的実践とみなすことができる。

## 2. 東ティモール独立と国家形成の歩み<sup>10</sup>

本章では、東ティモールの独立までの経緯と国家としての形成過程についてここで簡潔に整理しておきたい。

現在のインドネシアと東ティモールで構成されるティモール島はかつて、小王国が乱立していた地域であった。ポルトガル人が 16 世紀に到来し、白檀貿易を行い、カトリックを布教したとされる (松野, 2002, p.13)。そののちに遅れてティモール島に到達したオランダとの間で領土獲得競争が繰り広げられ、1859 年にリスボン条約でポルトガルとオランダの間でそれぞれ東西にティモール等が分割され、ポルトガル領ティモールとなっている。ここで、領土としての東ティモールは形成されている<sup>11</sup>。

1942 年、日本軍は東ティモール全島を占領し、1945 年の敗戦後、ポルトガルによる東ティモール支配が回復している<sup>12</sup>。独立の機運が高まったのは、1974 年のポルトガル革命と独裁体制であるエスタド・ノヴォが終焉したことがきっかけであった。この地の住民が民族独立運動を起こすのは 1974 年の宗主国ポルトガルでのカーネーション革命後であり、その運動を担ったのは 1960 年以降植民地に導入された近代教育を受けた最初の世代であったとされる (松野, 2010, p.73)。

1975 年、その運動を担った独立派 (フレテリン等) と反独立派の対立が激化し、11 月 28 日、フレテリンにより、東ティモール民主共和国の独立を宣言した。特にアフリカのポルトガル植民地の解放闘争をモデルとして 1975 年に結成されたフレテリン (東ティモール独立解放戦線) は、反植民地主義、反封建主義、近代化、自主自立をスローガンに掲げたとされる (松野, 2010, pp.73-74)。その後、インドネシア軍が東ティモールに侵攻し制圧され、1976 年、インドネシア政府は東ティモールを第 27 番目の州として正式併合を宣言し、独立は一度挫折することとなる (松野, 2002, pp.113-119)。東ティモールのレジスタンスらが敗北を喫した中、インドネシアは軍を各所に設置し、インドネシア主導の開発を進め、占領体制を確立する (松野, 2002, pp.124-126)。

1991 年 11 月、インドネシア軍による独立派が虐殺されるという惨事、サンタクルス事件が発生する<sup>13</sup>。この惨事は、国際社会の東ティモール問題に対する関心を引き出したものの、インドネシアの東ティモール占領体制に大きな変革には繋がらなかった (松野, 2002, pp.172-176)。

独立へと事態が動き出す契機となったのは、タイから波及した通貨危機に端を発する経済危機のもとで、1998 年 5 月にインドネシア大統領スハルトが退陣したことであった。この政変を境に、インドネシア政府は東ティモールの将来に関する方針を転換していく。1999 年にはスハルトの後を継いだハビビ大統領が、東ティモールの独立を容認する旨の発言を行い、遂に独立に向けた各種合意がなされた (松野, 2002, pp.224-232)。同年 6 月には国連安保理による直接投票に向けた国連派遣団 (UNAMET) が設立され、有権者登録等がなされる (松野, 2002, pp.232-234)。同年 8 月 30 日に実施された投票は、独立支持が 78.5% だったものの、結果発表後治安が急速に悪化したため、オーストラリアを中心とした多国籍軍が上陸し沈静化を図った (松野, 2002, pp.244-246)。

その後、国連東ティモール暫定行政機構により、セルジオ・デ・メロ氏を中心に東ティモール独立に向けた準備が進められ、2002 年 5 月 20 日に東ティモール民主共和国がシャナナ・グスマン大統領、マリ・アルカティリ首相のもと正式に成立した (東, 2009, pp.176-212)。

独立後の東ティモールは、2006 年に発生した西部出身の国軍兵士による差別待遇改善要求のデモをきっかけとした暴動や、2008 年のラモス＝ホルタ大統領とグスマン首相の襲撃事件が発生したものの、現在では治安は安定している (坂根, 2024)。2025 年 10 月 26 日にはついに長年の悲願であった ASEAN 加盟を達成することとなった (ASEAN, 2025)。

ここで重要なのは、確かに独立を求める主張と運動の歴史は存在していたものの、ポルトガル植民地とし

<sup>10</sup> 本章に関しては以下の文献等に依った。(福武, 2025a; 福武, 2025b; 松野, 2010; 松野, 2002; 山田, 2006; 外務省, 2025)

<sup>11</sup> 東ティモールの領土において特徴的な点として、ティモール島内のインドネシア領内の西ティモール地域にオイクシという飛地がある点であろう。遅れてやってきたオランダがポルトガルを徐々に駆逐したものの、オイクシ周辺には強力な指導者がいたため、その領有を断念したことが成立の理由である。(松野, 2002, p.14)

<sup>12</sup> 日本軍の慰安所などが設置された記録も残っている。(e.g. 田中, 1983)

<sup>13</sup> この時の様子は、東ティモール抵抗運動博物館で詳細に展示されていた。

て、さらにインドネシアの一地域として侵略・占領されてきた空間が、2002年を境に新たな国家として独立を果たしたという点である。独立を境に、それまでのインドネシア施政期に形成された「インドネシアらしい」建築や記念碑といった空間配置や、服装・料理など文化的要素から距離を取りつつ、「東ティモールとは何か」をあらためて位置づけ直す必要が生じたといえる。

ところで、世界には独立を主張しながらも、他国に包摂されたままの地域が少なくないなかで、東ティモールはいかにして独立へと舵を切ることができたのだろうか。ベネディクト・アンダーソンは、「東ティモール」というナショナリズムの形成が比較的速やかに進展したことを指摘し、それは単に官僚的に定められた「地図化された想像」だけでは説明できないと論じる(Anderson, 2001, p.237)。彼によれば、インドネシア当局が住民を民族名や部族名ではなく「東ティモール人(East Timorese)」と呼んだこと、カトリック人口の増加とともに教会言語としてテトゥン語が用いられたこと、そして1975年の独立鎮圧以降、軍や学校といった国家機構が設置されたことが、むしろ「東ティモール人」であるという自覚を強めたとされる(Anderson, 2001, pp.237-239)。

このように、東ティモール人という政治的主体の形成は、行政区画としての境界のみならず、教育・宗教を含む制度的配置と密接に結びついていた。独立後の「東ティモールとは何か」をめぐる再解釈の過程は、国旗や記念碑、指導者の肖像、伝統家屋といった、公的空間における視覚的表象の再編成としても観察できる。本稿が次章で検討するのは、まさに東ティモールという国家が、公的空間の中でどのように「視覚的なもの」として現れようとしているのか、という点である。

### 3. 東ティモールと公的空間

#### (1) 国家を可視化する装置としての国旗

ある国家がその領域を示す上で、そして、国家を他者が実体としてイメージする象徴として「国旗」というものは、国家及びアイデンティティの中心的な象徴装置であり、政治的実体の象徴であり、多くの場合、当該国の地位、しばしば権力の象徴として、公的に掲示されるものでもある(Firth, 1973, p.309)。そしてまた、ある領域において、その国らしさを想像する上で、国旗というものは用いやすい視覚的政治装置でもある。この点に関して、国旗を掲げることは、最も手っ取り早くその領域におけるその国らしさを示すことのできる行為である<sup>14</sup>。ピリグが指摘するように、旗はしばしば背景と化し、日常生活において見過ごされるが、まさにその日常性こそが国家想起の役割を果たしている(Billig, 1995, p.50)。そしてさらに、旗の機能を記号と象徴に分け議論した、文化人類学者のレイモンド・ファースは、国旗の象徴的機能について、入手容易性、可変性、掲揚や展示が容易にできる適応性、そして成員に態度や感情を伝えることができる高い識別性を持っている点を挙げ、簡単な所作で集合的感情を喚起しうる媒体性を論じている(Firth, 1973, pp.298-299)。

これらを踏まえると、旗は記念的・儀礼的使用だけでなく、日常空間における存在を通じ「その国らしさ」を反復的に可視化する装置としても機能する<sup>15</sup>。本節では、この観点から東ティモールの公的空間における国旗の用いられ方を検討する。

<sup>14</sup> 例えばトルコ共和国のように、巨大な国旗掲揚台を数多く公的空間に設置し、政治的広報物などをトルコ国旗をモチーフに作るなど、といった方法である。この行為により、欧州でもイスラム圏でもなく、此処は確かにトルコであるという“国家性”を演出することに結果として成功しているとも言える。

<sup>15</sup> さらに、国家として、まだ長い歴史をもたない場合、国旗以上にその国を象徴するシンボルはまだ確立できにくいと推測される。例えば、我が国らしさの象徴でもある「富士山」は、文藝、文学、芸術といった長い文化的営みの中で、生み出された象徴でもある。新しい国家の場合、それらはおそらく創造する過程の途中であるため、国家性を国旗で示すことが喫緊の課題であると言える。

### 1) 国旗と東ティモールらしさ

東ティモールの国旗は、独立運動期のフレテリン(FRETILIN)の党旗意匠を継承して制定された[写真 1]<sup>16</sup>。このような独立運動時代に用いられた旗が、その後国旗へと昇華されることはしばしば起こる。なぜなら国旗の創造は、現代の国民形成における政治的象徴作用の一部としてあまりにも一般化しているため、人々は国民国家に至る前に、すでに旗の承認へと進むことさえあるとされるからである (Firth, 1973, p.304)。



[写真 1] フレテリン党本部に掲げられる政治ポスター。フレテリン党旗が描かれているのがわかる。2025 年 3 月筆者撮影。



[写真 2] エロ・ディリ。航空機には東ティモール国旗が描かれる。2025 年 3 月筆者撮影。



[写真 3] エロディリ機内食の様子。赤と黄色の色彩からは東ティモール国旗を連想することができる。2025 年 3 月筆者撮影。



[写真 4] 大通りに整列された電灯と垂れ下がる国旗。これらの存在により、この地が東ティモールであることを視覚的に経験することが可能となり得る。2025 年 3 月筆者撮影。

では、東ティモールにおいて国旗は如何に用いられているのか。まず、入国経験の前段階として、ナショナル・フラッグ・キャリアを検討したい<sup>17</sup>。なぜなら旅行者は航空会社の機体意匠や色彩、機内体験を通じて、訪れようとする「国家」を早い段階から解釈しはじめるからである。東ティモールの事実上のフラッグキャリアである、エアロディリ (Aero Dili) の塗装のモチーフとして国旗は用いられている<sup>18</sup>[写真 2]。国営ではなく、

<sup>16</sup> 国名・国旗は 1975 年の独立宣言当時のものを採用し、フレテリンによる独立宣言が有効だったことを示しているとされる (松野, 2010, p.75)。この点に関しては (Arthur, 2019) も参照のこと。

<sup>17</sup> 対外的には、軍艦、ナショナル・フラッグ・キャリアの航空機、大使館その他の代表施設における国旗の掲揚は、当該国の地位を象徴する。ゆえに、国際連合での国旗使用には「儀典 (プロトコル)」が伴う。この対外的地位は権力とも結びついており、国旗が示されることは、当該国家の政策への遵守を強制する行動が直接に取りうるの可能性を含蓄する。(Firth, 1973, p.308)

<sup>18</sup> エアロ・ディリ公式 Web ページによれば、Aero Dili は、スローガン「BUILD THE NATION (国を築く)」のもとに設立された東ティモールのナショナル・エアラインであるとされる。パイロット、客室乗務員、エンジニア、地上職など、世界

民間主体の航空会社であることを考えると、他のデザインを採用することも考えられただろう。あえて国旗を航空機の塗装デザインに採用している点からは、東ティモールを示す象徴として、国旗の位置付けが高さを窺い知ることができる。旅行者は、搭乗前に航空機のデザインを見ることを通じ東ティモールを訪れることを意識することができ、搭乗中、そして現地に降り立つというプロセスを踏むことで、国家経験をすることが可能となる。例えば、提供される機内食なども、赤や黄の色彩などから「国旗のイメージ」を踏襲されているようにも見受けられる[写真 3]。



[写真 5] タイス市場で観光客向けに販売される土産は国旗をモチーフにしたものが数多くみられる。2025 年 3 月筆者撮影。



[写真 6] 国旗を掲げる少年のストリートアートは同じ主題のものが複数観察された。2025 年 3 月筆者撮影。

このような東ティモール国旗は、同国の公的空間においても多く観察される。例えば[写真 4]のように、道路の中心の一枚一枚国旗が掲げられた電灯のようなものである。こうした国旗の掲揚によって、この地がインドネシアでもポルトガルでもなく、確かに東ティモールであることを示すだけでなく、東ティモールらしさを演出する装置として国旗が用いられていることが窺い知れる。さらに土産物は重要な東ティモールらしさを知る上でも重要である。タイス市場は、その売り物の多くが国旗をモチーフにしたものであった[写真 5]。全体の印象として東ティモール＝旗の色というイメージが強く想起される。

先行研究において、ストリート・アートは、多くの若い東ティモール人にとって強力な象徴的表現・自己同定の媒体であると位置付けられ、彼らはそれをを用いて、進化する国民アイデンティティへの肯定的な同一化を行うと同時に、これまでの国民形成が多分に排他的であった性格に異議を唱えてきたとされる (Arthur, 2019, p.204)。筆者が訪れた際にも、このようなストリート・アートは公的空間で簡単に観察された。特に、国旗を掲げた少年の図像は、同国において複数観察されたものである<sup>19</sup>[写真 6]。

新たな国家建設に取り組む際、確固たるその国の象徴がまだ確立されていない場合、もしくは、シンボルとそれに対する「意味」がその領域内で共有されていない場合、“国旗”は手っ取り早くその国らしさを示すことができるシンボルとして用いることが可能である。この点に関して東ティモールは、まず東ティモールらしさを示す象徴として国旗が数多く散見される点で示唆的である。そして、このような強く熱狂的に振られることのない、国旗の用いられ方は、先述のビリグの「平凡なナショナリズム」の議論とも通ずる。特にビリグの議論において重要な点は、普段の生活において何気なく国家性が再生産されていることであった。上掲の航空機だ

---

の航空分野で活躍する東ティモールの人材育成を目指し、同国の人びとの交通を円滑にするとともに、東ティモールにも国際基準で航空会社を運営する能力があることを世界に示すことを目的としている。2018 年に運航証明 (AOC) を取得して東ティモール国内線の運航・サービスを行っている。Aero Dili (n.d.)

<sup>19</sup> この旗を掲げた少年のストリートアートは、複数観察できたものであるが、その主題はどのようなものであり、作者が同一人物か、もしくは繰り返し参照され続けているイメージなのかについては調査することができなかった。

けでなく、電灯やストリートアートなどに架けられ、描かれる国旗からは、国家性の再現が見て取れよう。

特に完全に独立を果たした東ティモールにとって、熱狂的に旗を掲げ、ナショナリズムを喚起する場面はもはや希薄な事象になりつつあるのかもしれない。だが、公的空間において、何気なく掲げられ、描かれる国旗からは、その国らしさの表出だけではない、東ティモールという国家が再生産される過程を観察することができる<sup>20</sup>。



[写真 7]ニコラウ・ロバト像。空港からディリ市内に向かう際に、最初に目にする像である。2025 年 3 月筆者撮影。



[写真 8]ディリのロータリーに聳え立つフランシスコ・ザビエル・ド・アマラルの像。2017 年 5 月 20 日に落成した。2025 年 3 月筆者撮影。

## (2) 指導者の肖像

政治的指導者の肖像などは、その国家、もしくはその領域において政治指導者とはいわば、政治的共同体の構成員たる人々が露わにした期待や興奮、熱狂、憎悪、悪意などの表出と、それらの討議と葛藤の帰結としての象徴であり、つまり人々が望む社会の行く末を顕す表象とも言える<sup>21</sup>。つまり、公的空間において政治指導者や政治的シンボルの視覚的存在そのものは、いわば“その国らしさ”を創り出す装置であるとともに、その国において大事にされているものを、それを見る人々に伝える象徴でもある<sup>22</sup>。そして上述の国民的意識の醸成に向けた記念碑と追悼儀礼の活用は、東ティモール政府によってますます可視化されているとされ (Kent, 2015, p.12)、それらは実際に観察することができる。東ティモールの公的空間を見渡せば、指導者の銅像が環状交差点の中心に設置され、歴史顕彰に取り組んでいることもわかる。例えば[写真 7]は、建国の父であり抵抗運動の軍事指導者で、占領初期にインドネシア軍に殺害されたニコラウ・ロバト首相の像である<sup>23</sup>。この像は、彼の名を冠した国際空港の近く、空港道路がディリ中心部へ向かう主要幹線コモロ通りと交差する地点に聳え立っている。ロバトは戦闘服姿で描かれ、一方の手に東ティモール国旗、他方の手に銃を携え、その視線は首都へと向けられている (Kent, 2015, p.3)。ニコラウ・ロバトとともに初代大統領として 1975 年に独立宣言をしたフランシスコ・ザビエル・ド・アマラルの銅像は右手を天に差し向けながら演説している様子で立っている[写真 8]<sup>24</sup>。

このような銅像とされる政治的シンボルを「平凡なナショナリズム」の議論の範疇には入れてしまうのは、議論の余地があるだろう。なぜならブリグの議論においては、意識的に設置されるものというよりも、その国民国家を再生産させる諸要素が無意識的に行われているものに関して、その機能と潜む怖さが存在すると指摘

<sup>20</sup> もちろん「平凡なナショナリズム」の議論においては、本稿で取り上げるような表象が、実際に同機能しているのか、どのように国民という意識の再生産を繰り返す役割に果たしているのかについては議論の余地が残る。

<sup>21</sup> カリスマ的指導者は社会が生み出すものであり、社会の要請なしには、政治指導者は存在し得ないと言える。

<sup>22</sup> そしてそれらは、観光の対象ともなり得る、政治的象徴と観光の可能性については (齊藤, 2025) を参照されたい。

<sup>23</sup> ニコラウ・ロバトの像は他にもアイルウ (Aileu) にも設置されている (Government of Timor-Leste, 2014)。

<sup>24</sup> Government of Timor-Leste (2017) を参照のこと。

するからである (Billig, 1995)。ただし、この無意識的に公的空間においてに関して、東ティモールは示唆的な事例が存在する。

まず、東ティモール政治の特徴の一つは独立の決定時から現在に至るまで、シャナナ・グスマンやそのライバルのマリ・アルカティリといった一握りの政治指導者が非常に高いプレゼンスを保って政治の中心を担い続けてきたことであるとされる (井上, 2025, pp.316-317)。そして独立運動に深く関わり、国民の間に強い支持基盤を持っているこれらの指導者らも、国民アイデンティティにおける独立闘争の中心性を理解し、それを再生産してきた (井上, 2025, p.317)。特に東ティモールにおいて、独立運動時代のフレテリンのシャナナ・グスマンは東ティモールの精神的な指導者とされている<sup>25</sup> (山田, 2006, p.48)。彼自身、2007 年に設立した東ティモール再建国民会議 (CNRT) の旗に軍服姿のグスマンの肖像が描かれているように、かつての闘争時代のファリントンテイルの闘争姿を国民に向け投影している (井上, 2025a, pp.317-318)。

上述の点に関して、東ティモールの公的空間において、シャナナ・グスマンの肖像は掲げられるだけでなく、自動車にも描かれることも観察できる<sup>26</sup> [写真 9,10]。こうした日常的、そして自発的な肖像の使用と再生産が、公的空間の景観を通じて国のイメージ形成に寄与していると推測される。シャナナ・グスマンの肖像のように、何気なく掲げられ、人々によって自動車に描かれるものは、「平凡なナショナリズム」の一側面として捉えられることもできる。そしてそれらの存在は、訪れる旅行者らにも共有され、東ティモールらしさを経験できる一側面として機能している。



[写真 9] ニコラウ・ロバト国際空港内の登場ロビーで掲げられるシャナナ・グスマンの肖像。  
2025 年 3 月筆者撮影。



[写真 10] 自動車にもシャナナ・グスマンの肖像が描かれていることも観察できた。何げなく肖像の再生産がなされる様からは、同国が誰を重要視しているか推察できる。2025 年 3 月筆者撮影。

<sup>25</sup> この点に関しては、在東ティモール日本国大使館職員の記事 (小出, 2011) などにおいても彼が人気者であり、国民から慕われていることが言及されている。

<sup>26</sup> この点に関しては (Arthur, 2019) も参照のこと。



[写真 11]ディリ市内のティモールプラザ内に掲げられているウマ・ルリックの絵画。2025 年 3 月筆者撮影。



[写真 12]ストリートアートとして描かれる国旗とウマ・ルリック。東ティモールらしさを視覚的に理解できる代表的事例とも言える。2025 年 3 月筆者撮影。

### (3) 再生産される伝統家屋の意匠

最後に東ティモールの公的空間において散見された、伝統家屋の意匠についても検討しておきたい。

東ティモールの公的空間では、比較的容易に「ウマ・ルリック (Uma Lulik)」のイメージを目にすることができ、比較的目にとまる機会が多くあった。ここでは、ウマ・ルリックのイメージがどのように公的空間において登場するのかについて観察できたものについて提示することにとどめておきたい<sup>27</sup>。

聖なる家を意味するウマ・ルリックは、東ティモール社会と文化において家屋構造がもつ中心的な象徴価値を物語るものである。建築物としてのティモールの家は、文化的景観のなかで豊かに変化する様式に表現され



[写真 13]ワンダラービーチの休憩所。小屋の意匠がウマ・ルリックを連想させる。2025 年 3 月筆者撮影。



[写真 14]ニコラウ・ロバト国際空港ターミナルの建築意匠はウマ・ルリックを想起させる。このような視覚の手がかりをもとに、旅行者は東ティモールに来たことを意識することができる。2025 年 3 月筆者撮影。

<sup>27</sup> ウマ・ルリックの東ティモールの“家 (uma/uma lulik)”は、建物ではなく“社会を動かす仕組み”であり、占領下の抵抗を支え、いまも国づくりの基盤になっているとされる。この点に関しては (McWilliam, 2005)、それらの機能に関しては (宮澤, 2019) を参照されたい。

る (McWilliam, 2005, p.28)。テトゥン語で「家」を意味する伝統家屋は、何世紀にもわたり、社会的・民族的アイデンティティ、そして文化遺産の図像的な標識であり続けてきた (McWilliam, 2005, p.28)。

ウマ・ルリックの表象は[写真 11]のように、東ティモールの公的空間で掲げられ、ストリートアートとして描かれることも確認できた[写真 12]。これらの存在は、訪れる旅行者にとっては東ティモールらしさ (East Timornes) をより読み取りやすくも思われる。

このウマ・ルリックの形は比較的散見される。筆者が観察できた中では、ワンダラービーチの休憩所にも同様の意匠がなされている[写真 13]。そして注目すべきは、東ティモールの建築デザインとしても取り入れられている点である[写真 14]。空港のターミナルにも同様のデザインがなされている点からは、東ティモールらしさを生み出す取り組みを垣間見ることができる<sup>28</sup>。おそらくこのような家屋の形は、東ティモールの人々には意識されない側面であると考えられる。それは言い換えれば、筆者のように「来訪するもの」にとっては、その国らしさを体験することのできる視覚的存在として機能しているとも考えられる。

#### 4. おわりに

##### (1) 「国家性」を見ること

どのようにして「その国らしさ」は現れ、それらは体験されるのか。本稿において試みたことは、東ティモールにおいて、何気なく描かれ、垂れ下がる国旗の用いられ方や政治的指導者の肖像、伝統家屋の用いられ方を通じ、東ティモールの公的空間からいかに「その国らしさ」を体験しうるのかについて検討であった。東ティモールのような比較的新たに成立した国家において、こうした日常的な国旗や指導者、伝統家屋の表象が、「東ティモールとは何か」を形づくっていく過程にあること、さらにいえば「別の国に来た」という感覚を抱く手がかりになりうることを今回の観察を通じて述べてきたつもりである。とはいえ、今回の試みがいかなる評価を得るのか、もしくは批判にさらされるのかは今後の評価に委ねたい。特に、東ティモールという対象に対し、筆者は短期滞在の旅行者にすぎず、「東ティモールらしさ」を形成しているものを恣意的に選び出して記述している側面があることは否定できないだろう。

果たして、そのような立場から東ティモールの国家性を論じることにはどのような意味があるのか。ここでビリグの議論から今一度考えておきたい。

簡潔に言えば、国家性の表れに気づくことで、私たちは自分自身について何かを認識しているのだ。社会生活の日常に埋め込まれた、自らのアイデンティティの深層と仕組みに気づいているのだ。こうした修辭的な出来事は絶えず私たちに「我々」であることを想起させ、そうすることで、その想起自体を忘れさせてくれる。そして注意深く観察すれば、「私たち自身」への喚起だけでなく、「彼ら」や異質性への喚起も見えてくる。二度見する価値すらないほど身近なものが、次第に異質に見え始めるのだ。「私たち」(そして「彼ら」)が標示されるだけでなく、祖国もまた標示される。そして世界が祖国の集合体として提示されるのである。

(Billig, 1995, p.175)。

ビリグが示すのは、日常に埋め込まれた「平凡なナショナリズム」を手がかりにすることで、「我々」や「彼ら」といった区別、さらには祖国の輪郭そのものが見えてくるという視点である。本稿が扱った、何気なく垂れ下がる国旗や、壁面に描かれる伝統家屋のイメージは、まさにそのような平凡な標示の一部であり、「東ティモール」を視覚的に理解するための手がかりとして機能しているとも言える。もっとも、ジョン・アーリが指摘するように、何かを見るという行為には、あらかじめ構築された認識の枠組みが入り込む点に関しては考慮しておかねばならない。上述の点に関して、アーリは以下のように述べる。

ある特定の景色へのまなざしは、その個人の体験や思い出によって決まり、その枠組みは規範や様式で決まり、また、流布しているあれこれの場所についてのイメージとテキストにもよる。こういう「枠組み」は

<sup>28</sup> そして空港から降り立つ来訪者は視覚的差から、東ティモールらしさや他国との違いが連想されうるのかもしれない。

決定的な動機、技法、文化的なメガネとなって観光者が、具体的なモノや実態的な場所を「面白いし、いい感じ、美しい」と見るより先に、先行してそう見えるようにしてしまっているのだ。(中略) 見方が異なってしまふことで、モノとしての、構築された世界はいかようにでも違って見える(アーリ, 2014, pp.3-4)。

アーリの指摘するように、何かを見るという行為には各々にすでに構築された認識の枠組みめいたものがあるため、人は全ての物事を自然体として理解することはできない。無数にあるとされる情報の中から何らかの基準で取捨選択し解釈することで、物事を認識している。この点に関して、“国家性”、つまりその国らしさを認識する上でも同様であると言える。例えば、本稿が示したように、無数にある物事の中で、東ティモールらしさを示すものとして、国旗、政治的シンボル、伝統家屋に注目し、その国らしさを構成する一部として観察されうることを示した。言うまでもなく本稿の言う、「東ティモールらしさ」を示すシンボルは他にも無数に存在するだろう。そして「らしさ」は、そのネーションを構成している人々や訪れる来訪者によっても、感じ方や捉え方は異なると想像される。その点において今回は、東ティモールの文脈をほとんど解していない筆者の視点からみた東ティモールと言う「国らしさ」を記録したにとどまる<sup>29</sup>。

## (2)旅行者のまなざしと観光

では、上述の観点は「観光」という観点からは何が示されようか。最後に議論しておきたい。

東ティモール自体は観光的観点からは選択肢に挙げられにくい場所であることも事実である。「観光資源に乏しい」と評することは容易いだろう<sup>30</sup>。特に数多の衆目を集める観光地は、ソーシャルメディアの力によって雪だるま式にその魅力が再生産され、一方で「何もない」とされる地域は、次第に人々に忘れ去られるという運命を辿る。この観光地の選択に関してアーリは、以下のように警鐘を鳴らしている。

現代の観光のまなざしは、ますます、指標がハッキリしてきて、まなざしを向けるに値するモノと場所を明確にしているということだ。しかも、比較的数少ない観光スポットを指し示していて、結果、多くのツーリストがひじょうに限られた地域に集中することになる。(中略) 私たちは、数少ない選ばれた聖なる場所だけへの観光のまなざしを作る傾向から離れなくてはならないし、まなざしを向けられるものについてもっと柔軟にならなくてはならないのだ。(アーリ, 2014, pp.350-351)

他国を旅することは、自国を基準とし、自国とは異なる「その国らしさ」を探すことでもある。この点に関しては、観光資源の有無は無関係であるはずである(齊藤, 2025, p.74)。本稿で試みた、国家性を観察することは、過去やそれまでの日常生活で形成されてきた「まなざし」から脱却する取り組みでもある。このような何気なく再生産される「平凡なナショナルリズム」から、その国を眺めることは、昨今議論されている物事を「楽しむ力」とは何かを考える上でも有用ではないだろうか。

### 【引用・参考文献】

[書籍・論文等]

アーリ, ジョン・ラスン, ヨーナス (2014) 『観光のまなざし』(加太宏邦訳) 法政大学出版局

アンダーソン, ベネディクト (2007) 『定本 想像の共同体: ナショナルリズムの起源と流行』(白石隆・白石さや訳) 書籍工房早山

井上浩子 (2025) 「現代東ティモールのナショナルリズムと国家制度の運用」福武慎太郎(編)『東ティモール: 独立後の暮らし

<sup>29</sup> ただしこの事実は、フィールドワーク上の限界についても指し示すことでもある。本稿で示した資料は東ティモールの公的空間において撮影できたものであり、筆者の観察の範囲内であることの限界は指摘できよう。そして、それらは政府側や国民により作られたものであるため、政府側の意図と国民側の意図が織り混じっていることは否めない。ただ、「国家」は国民と統治者たる為政者側の双方の存在により形成されるものであることも事実であるため、双方に注目することは重要な示唆に富むとも考えられる。

<sup>30</sup> この点に関しては、検索サイトに掲載されている旅行ブログや福武(2025a)などを参照されたい。

- と社会の現場から』彩流社、pp.304-331.
- 井上浩子 (2018) 「2017 年のティモール・レステ：FRETILIN=民主党政権の発足と野党連合との攻防」『アジア動向年報』、pp.417-432.
- 今井昭夫(編) (2014) 『東南アジアを知るための 50 章』明石書店
- ウィニッチャクン, トンチャイ (2003) 『地図がつくったタイ：国民国家誕生の歴史』(石井米雄訳) 明石書店
- 萱野稔人 (2005) 『国家とはなにか』以文社
- ゲルナー, アーネスト (2000) 『民族とナショナリズム』(加藤節監訳) 岩波書店
- 斉藤穂高 (2025) 「政治宣伝絵画のある風景：社会主義国ベトナムの公的空間から考える“政治文化ツーリズム”の可能性」『大阪観光大学研究論集』25、pp.69-76.
- 笹生心太 (2025) 「『平凡なナショナリズム』対『日常のナショナリズム』論争：スポーツ研究への応用可能性を探る」『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要』60、pp.73-84.
- 笹生心太 (2023) 「スポーツメディアに見られる『ナショナリズムの言説』：ワールドベースボールクラシック 2023 に関する新聞報道に着目して」『体育学研究』68、pp.625-641.
- 塩川伸明 (2008) 『民族とネイション：ナショナリズムという難問』岩波書店
- スミス, アンソニー D (1999) 『ネイションとエスニシティ：歴史社会学的考察』(巢山靖司・高城和義他訳) 名古屋大学出版会
- 田中淳夫 (1988) 『チモール：知られざる虐殺の島』彩流社
- トビー, ジョン (2008) 『パスポートの発明：監視・シチズンシップ・国家』(藤川隆男監訳) 法政大学出版局
- 東大作 (2009) 『平和構築：アフガン、東ティモールの現場から』岩波書店
- 原百年 (2011) 『ナショナリズム論：社会構成主義的再考』有信堂高文社
- フォスター, ハル (2007) 『視覚論』(樽沼範久訳) 平凡社
- 福武慎太郎(編) (2025a) 『東ティモール：独立後の暮らしと社会の現場から』彩流社
- 福武慎太郎 (2025b) 「2024 年のティモール・レステ：政権交代後の行政の混乱と都市開発問題」『アジア動向年報』、pp.397-414.
- 福武慎太郎 (2024) 「2023 年のティモール・レステ：シャナナ・グスマン政権の誕生」『アジア動向年報』、pp.399-414.
- 松井和久 (2003) 「2002 年の東ティモール：21 世紀最初の独立国家、苦難の船出」『アジア動向年報』、pp.419-430.
- 松野明久 (2010) 「東ティモール：グローバル化時代の国民国家建設」『民俗学』34(132)、pp. 73-80.
- 松野明久 (2002) 『東ティモール独立史』早稲田大学出版部
- 水野久美子 (2008) 「2007 年のティモール・レステ：グスマン新政権誕生－治安の安定、貧困対策が最優先課題」『アジア動向年報』、404-416 ページ。
- 宮澤哲 (2019) 『平和構築と伝統的ガバナンス：東ティモールの復興過程において伝統的司法・規範が果たした役割に関する考察』東京大学提出博士論文
- 山田満(編) (2006) 『東ティモールを知るための 50 章』明石書店
- 横田幸典 (2001) 『東ティモールに生まれて：独立に賭けるゼキトの青春』現代書館
- Anderson, Benedict (2001) "Imagining East Timor," *Lusotopie* 8, pp. 233-239.
- Arthur, Catherine E. (2019) *Political Symbols and National Identity in Timor-Leste*. London: Palgrave Macmillan.
- Bentrovato, Denise and Skårås, Merethe (2023) "Ruptured imaginings amid emerging nationhood: The unsettled narrative of 'unity in resistance' in South Sudanese history textbooks," *Nations and Nationalism* 29, pp. 1041-1056.
- Billig, Michael (1995) *Banal Nationalism*. London: SAGE Publications.
- Dumitrica, Delia (2019) "The ideological work of the daily visual representations of nations," *Nations and Nationalism* 25(3), pp. 910-934.
- Firth, Raymond (1973) *Symbols: Public and Private*. London: George Allen & Unwin.
- Fox, Jon E. (2017) "The edges of the nation: a research agenda for uncovering the taken-for-granted foundations of everyday nationhood," *Nations and Nationalism* 23(1), pp. 26-47.
- Kamisuna Takahiro (2023) "International origin and development of nationalism: generational transformation of East Timorese nationalism under Indonesia's occupation (1975-1999)," *Nations and Nationalism* 29(3), pp. 1125-1141.
- Kent, Lia (2015) *Remembering the Past, Shaping the Future: Memory Frictions and Nation-Making in Timor-Leste*. Canberra: Australian National University.
- McWilliam, Andrew (2005) "Houses of Resistance in East Timor: Structuring Sociality in the New Nation," *Anthropological Forum* 15(1), pp. 27-44.
- Niner, Sarah (2000) "A Long Journey of Resistance: The Origins and Struggle of the CNRT," *Bulletin of Concerned Asian*

*Scholars* 32(1-2), pp. 11-18.

Niner, Sara (2005) "President Xanana Gusmão: A Transforming Leadership," *Development Bulletin* 68, October, pp. 39-42.

Urry, John (2002) *The Tourist Gaze*. 2nd ed. London: SAGE Publications.

[ウェブサイト等]

外務省 (2025) 「東ティモール基礎データ」外務省ウェブサイト、

URL: <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/easttimor/data.html> (最終閲覧日 2025 年 11 月 29 日)

小出 (2011) 「マウン・ポートと素敵な人々」在東ティモール日本国大使館、

URL: [https://www.timor-leste.emb-japan.go.jp/column\\_koide3\\_j.html](https://www.timor-leste.emb-japan.go.jp/column_koide3_j.html) (最終閲覧日 2025 年 11 月 29 日)

坂根宏治 (2024) 「独立から 20 余年：東ティモールの脆弱な安定をいかに発展に転換するか？」国際情報ネットワーク

IINA、URL: [https://www.spf.org/iina/articles/sakane\\_16.html](https://www.spf.org/iina/articles/sakane_16.html) (最終閲覧日 2025 年 11 月 29 日)

Aero Dili (n.d.) "Aero Dili: Official Website," Aero Dili,

URL: <https://www.aerodili.com> (Accessed on Nov. 29, 2025).

ASEAN (2025) "Forging a New Era: Timor-Leste Admitted into ASEAN," ASEAN official website,

URL: <https://asean.org/forging-a-new-era-timor-leste-admitted-into-asean/> (Accessed on Nov. 30, 2025).

Government of Timor-Leste (2017) "Statue of Francisco Xavier do Amaral inaugurated in Dili," Government of Timor-Leste,

URL: <https://timor-leste.gov.tl/?p=17985&lang=en> (Accessed on Nov. 29, 2025).

Government of Timor-Leste (2014) "Inauguration of the statue of Nicolau Lobato, in Aileu," Government of Timor-Leste,

URL: <https://timor-leste.gov.tl/?p=10977&lang=en> (Accessed on Nov. 30, 2025).